

冬帝 早村 春鶴

黒雲を従へ冬帝街つつむ
冬帝にひれ伏すがごと雲低し
冬帝に占拠されたる街静か
冬帝の居座り続く丸四日
冬帝の退散せしか陽のさして

筆始 一谷 春窓

在りし日の師をまなうらに初硯
在りし日の師に背を押され筆始
書き終へて親の顔見る筆始
屠蘇祝ふ父の遣せし赤絵皿
初詣姨捨駅を通り過ぐ

師走 東 素子

重ね来し師走の姉の長電話
桜葉の赤き一葉ひとはの師走風
風物詩禁止されたる落葉焚き
蓮根掘り白さ極まる潔いさぎよさ
いずこより鳥集まるや木守り柿

風邪 武部 春浦

初雪や障子明るき影舞台
冬の月スーパームーンは宇宙の眼
陽をうけて軒に連なる吊し柿
煌きは冬の花火よクリスタル
猫の尾に慰められし風邪の床

師走街 山本 春英

ねんねこに赤子の眠る師走来る
公園の整備すすみし街師走
短日や小犬と老女の散歩径
忙せわしなく母探す娘むすめら夕千鳥
我夫わがつまの思い出多し師走妻

冬の海 井上 元良

冠雪嶺刻々変はる夕景色
北風荒び海鳥の群耐へをりぬ
浜の市子持ち鯛売られけり
温泉三味星々の綺羅寒天に
黒雲の重たげに垂れ冬の海

年の暮 山岡 扶佐

朱鷺とぎ色の雲は西空十二月
今更に手際なぐさ嘆くも暮早し
贈り物やさしさ溢る冬日和
はやり風邪人ごととして遊び行く
年取るも慣じみの声は電話より

虎落笛 東原 春城

虎落笛心ゆさぶる音のして
耳たてし子犬窓際虎落笛
墨をする音消されけり虎落笛
寒風や杖もちかえて腰のばす
犬走り子どもら走り枯葉舞ひ

初明り

早村 春鶴

初明り雲を照らして朱に染めて
書き初はホテルフロント自書サイン
檀原の宮人あふれ三ヶ日
檀原の宮の御降り畝傍山
旅すでに六日目となる注連の内

大雪

一谷 春窓

大雪を搔いて朝湯を溢れしむ
階段に洩れ来る灯り受験生
咲き初めし紅白梅の一木に
草青むサッカーボール転がり来
蓬萌ゆ陽を隠す雲無かりけり

屠蘇祝

東 素子

年毎に老いを楽しむ屠蘇祝
凜として威儀を正して鏡餅
羽子板を飾るリビング華やいで
お正月晴れ着の模様今昔
袂持ち雪を追いたる幼き日

初雀

武部 春浦

小春日の縁側猫の腹白し
野良猫もさぞやと思ふ寒さかな
出来の良さはほれば大根引き
鳴きかわす寒の川面の鴨の陣
挨拶に立ち寄る数羽初雀

初風呂

山本 春英

初風呂の薬湯身にしむ八十路かな
ダイエツト変化なき子のかるたとり
舗装路に負けじと青き冬の草
千両の実の色冴へて我好み
極月にいただく手帳赤うれし

七種粥

井上 元良

初詣凜凜しき孫と語る夢
鈴の音と破魔矢授かり御神酒受く
書初も常と変らぬ臨書から
狭庭にて摘みし食材七種粥
七種粥野の香湯気立つ長寿へと

初詣

東原 春城

嬰兒抱く若き男や初参り
老体は列の外なり初詣
初硯去年の音色を確める
初詣合格祈願孫神妙
初鏡来客ありと夫の声

雪解風

早村 春鶴

竹ゆすり竹ゆすりして雪解風
雪落とす孟宗竹の武者振り
雪解風竹ざわめかせ通り過ぐ
天神の絵馬のあばれて雪解風
檀原の宮は穏やか紀元節

探梅

一谷 春窓

探梅や鳥影不意に翻る
春といふ文字に和みの心地して
孫の来て古雛飾る早々と
髪黒き女雛の袖の色褪せて
春風や籠をはみ出すフランスパン

凍解

東 素子

背伸びして切手買う児や冬帽子
児の文の宛先いずこ二月午後
コンサートジャズを満喫二月尽
魅いられてトリオ輪奏聴く余寒
ジャズマンの高揚さらに凍解くる

初鏡

武部 春浦

輝いてちぎれ飛ぶ雲出初式
上がりめに古稀の眉かく初鏡
陽射し追い陽射し追いして日向ぼこ
しわしわのお札の辿る二月尽
冬バラの蕾のままに首垂るる

春寒

山本 春英

ころがりて霰の散るや地に消ゆる
筆洗ふ子の悴みし小さき手
おむすびの中身きめかね春寒き
春の風邪娘の寝顔美しき
ノクターンを聴き入る夜や春の猫

雪こんこ

井上 元良

樹氷林白一色に木霊めく
六地藏雪の帽子に目を細め
風紋を描く画家めく雪こんこ
鬼を追う子らにたじたじ鬼やらい
燕汁緑鮮やか気もらい

早春

山岡 扶佐

寒明の母穏やかに風邪癒える
浅き春雪深き里如何に居る
彼の里は休校三日春の風邪
何事もなくとつぶやき凍解くる
宿題をひとつ賜り凍返る

寒波

東原 春城

初雪や子犬と僧がたわむれて
大寒波五臓六腑に滲みて来し
冬將軍鍵穴からもせまりくる
落ち椿拾うて吾子の髪飾り
師逝きて教室今日も寒波中

雪の果て 早村 春鶴

夕暮の雨はいつしか雪の果て
今朝降りし春雪午後に消え果てて
午後になり晴れて消されし春の雪
又晴れて積もらぬまゝに春の雪
目覚めたる一回きりの春の雷

受験 一谷 春窓

受験子の喜び溢る電話口
ペダル踏む足の軽さや春めきて
駆け足の子等に初蝶追ひつけず
ふうと息腹に折鶴春日浴ぶ
折鶴の背に伸ぶ日射しあたたかし

独活 東 素子

真白なる独活の歯切れを楽しみて
朝どりの独活の香りの爽やかに
踏のたう片掌に余る摘みし朝
落のたう食めば口中ほろにがき
爛酒に馥郁たりし露の臺

春の雪 武部 春浦

想い出の路上の灯り春の雪
遠くより呼ぶ声のあり彼岸会に
あたたかや顔をうずめて眠る猫
去りし日を偲ぶ品あり春惜しむ
海中に春の風あり目を閉じる

遠霞 山本 春英

貨物車の向うの山や遠霞
餌拾う親のあと追ふ雀の子
作業する背中に芽柳風さそふ
たくましきものの芽とみて鉢に水
母亡くも笑顔たやさず卒業す

はるがきた 井上 元良

耕して土覚めよと畦立てる
先駆けのクロッカス揺るる日ざし揺る
踏まれても知らんふりして大ふぐり
捨て屑菜茎立ちをりし勢いみる
四ツ手網白魚跳ねる潮光る

陽炎 山岡 扶佐

先輩の遺志継ぐ書展遠霞
老夫婦つなぐ手愛ふ春めきて
北陸の春田の青みまだ僅か
陽炎や立山見つゝ和倉へと
春炬燵野球応援母子共

ひなあられ 東原 春城

ひなあられ孫から十粒もらひけり
紅の味口に溢れしひなあられ
顔一ぱい口開けし孫ひなあられ
ひざ痛の脚をなだめて青き踏む
アスファルト継ぎ目一列花莖



花疲れ 早村 春鶴

バス中の人皆寡黙花疲れ
満開の老桜送迎無人駅
通過せし花満開の無人駅
にぎはひの中にまぎれて春の街
行く春や園舎の影を踏み仰ぐ

花衣 一谷 春窓

卓上の彩り豊か春野菜
夫逝きて早や三十年の春彼岸
一人には馴れたる暮し花衣
地下鉄を出で春の雨頬つたふ
春愁話せば楽になることも

蓬摘む 東 素子

花の房落ちるを見るや目白あて
落とされし房の桜花の水盤に
空覆ふ桜満開眼に重く
指先に香写して蓬摘む
口中に自然の恵み蓬めし

春昼 武部 春浦

ママを呼ぶ子ども見つめし春の猫
春昼や猫を抱いて海を見に
島深し恐龍のごと春眠す
島影の一瞬よぎる花の下
桜樹下の傷痕軍人ハーモニカ

奈良研修会 山本 春英

書に集ふ館の宴花ぐもり
一ひらのさくらひらひら風にのり
どの膳もさくらづくしのおもてなし
一本の蕨のの字に椀の中
春の星愛しき孫のひとみかな

花祭 山岡 扶佐

農園のくじ当たりたる春の蝶
庭に鍬あらたな興や朧月
桃の花畝立てる君父に似る
ひとひらの落花や葛城研修日
花祭白洲忌告げ雨となる

春灯 東原 春城

老婆の目もんしろ蝶を追ひ続け
大きめのくつ音ならず新入生
春休み待合室に見等あふれ
春灯や古本ばらけ装丁す
大字書の上に散りしく桜かな



五月闇

早村 春鶴

慕ひ来し人の訃報や五月闇
書仲間の訃報にわか五月雨る、
白藤の花咲かせおる杉大樹
けもの径袖径消して竹落葉
リュック背に山降り来る夏の人

更衣(ころもがえ) 一谷 春窓

春行くや涙もろさの日の増して
探しもの出でず虚ろに菖蒲園
こちち良き洗車の水や夏に入る
久方の風衣衿なる初裕
久々に風を吹ひ込む更衣

風薫る 東 素子

風薫る小さき書展の異空間
窓占める大樹の書展皇風
子の歓声見栄切り泳ぐ鯉幟
あわあわと空に溶け込む桐の花
八重の藤ゆったり重き存在感

松 蟬

武部 春浦

子燕の橋くぐり抜け空を切る
棒切れの影動きたる月朧
釣人の黙して連なる初夏の海
夏の蝶ふと現われて庭奥へ
春蟬や網まだ早し立て置かれ

矢 車 山本 春英

愛猫の弱わるを見つ、夏来たる
静岡へ待ちかね頼む新茶かな
矢車の音なく回る旧家かな
藤棚おんなあらしの女主の藤のごと
もの優し書友の訃報五月雨る、

端 午 山岡 扶佐

子供の日しなやかに生き大姉逝く
練供ねりくよう養思い出話し聞くことも
学ぶこと星のごとくぞ夏に入る
母の日や感謝の便り書く児あり
母の日の過ぎて安価わがやばなの我家花

五月闇

東原 春城

なりすます庭の女王白牡丹
鋏先に蚯蚓一匹イナバウワー
ジャスミンや盲導犬の足ゆるむ
たんぽ、を摘む子を待てり若きママ
五月闇友の訃報の知らせあり



梅雨曇 早村 春鶴

整理せし文に師の文字梅雨晴間
師の法要高野でありと梅雨曇
雨呼ぶか鳴き止むことなき雨蛙
虹色に光りし蜥蜴見失なう
植田まだまわりの景色宿しをり

夏帽子 一谷 春窓

のびて来し草に背をむけ籐寝椅子
緑陰の光と影をひとり占め
笑顔出て帰り行く友夏帽子
郭公を間近に聞いてより朝餉
作り手の名負ふ初茄子道の駅

木下闇 東 素子

窓うめる青葉のそよぎ夫寢息
いよいよに寡黙となりぬ木下闇
夫のいぬ座敷の広き朱夏の夕
一人居の虚し冷酒のほろにがし
病床の夫へ気づつかい梅雨に入る

入梅 武部 春浦

五月闇家の内こそなほ濃かり
入梅や走るネオンの深夜便
島の灯を海に浮かべて五月闇
梅雨入りや今年のあやめ遅かりし
あやめ忌と一人名付けて合掌す

紫陽花 山本 春英

梅雨の入り火傷の小指いたわりて
紫陽花をそつと活けてく友のゐて
約束は又弁当に豌豆飯
五月雨や八十路を急かす信号機
六月が来て愛猫法要の便り来て

高野山 山岡 扶佐

思い出は新茶香りて蘇り
花胡瓜数へて収穫待ちわびて
老鶯の出向へありて高野路
灯籠の火入れ式あり夏高野
萬緑の高野の経をもらひ受け

燕の子 東原 春城

背のびする子の目の先に燕の子
燕の子頭上の電線コーラス団
燕の子空中の親探す口
足ゆるむ夜の紫陽花せまり来る
梅雨晴間軒下全部母の物

七変化 山内 松琴

七変化家主逝けども色変へず
梅雨晴間別れの駅の若夫婦
フランス語も混じりし梅雨の道後の湯
またのぞき梅雨空眼下逆か景色
三日月の夏の夜空を切るがごと



夕立 早村 春鶴

夕立の来る気配して雲重し
川上に夕立ありし濁りかな
遠雷にはや雨粒の二つ三つ
白百合の匂ひと共に客となる
半夏生白の目立ちし峠道

打ち水 一谷 春窓

寝つけぬ夜しばし団扇を子等に向け
木陰まで遠き道のり炎天下
水打ちて土の匂ひの風生まる
等分を見守る子等の目西瓜切る
蚊遣火のゆらぐ煙の消ゆるころ

梅桃 東 素子

実生枇杷どこまで育つ葉の茂り
夏木立庭にあふれて美しけれ
ゆすらうめ摘む朝一番幼き日
あじさいの手毬のごとき花の群れ
心理戦ウインブルドン街は夏

短夜 山本 春英

久方のオペラ鑑賞夏の月
短夜やはや白月の雲中へ
七夕は母の命日星二つ
転勤へ思案の多し夜半の月
渡来せる火アリの報や虫眼鏡

涼風 東原 春城

おじぎする含羞草にも幼子が
涼風をくれし隣席会釈する
夕立や軒に駆けこむ老婦人
遠くよりウェーブ伝へし青田風
大筆の第一画目汗の上

青田中 山内 松琴

朝日あぶ不動の鷺は青田中
クラス会青田の中のログハウス
雨近しアナベル淡く庭照らす
分け入りし先に笹百合山歩き
飲み明かす息子夫婦と父の日に

梅雨 北畑 芳草

七変化青に落ちつきやすらぎぬ
葉に染まり鳴くや四葩の青蛙
佇めば頬をなでしか青田風
梅雨空にひびく田植機快調に
稚児達のお田植はやす笛太鼓



新涼 早村 春鶴

人住まぬ隣家の庭の蟬時雨
新涼や体調もどる旅となる
新涼の里山かすめ飛行機雲
法師蟬羽化の直後かつまづける
てにをはの一字に迷ひ秋立ちぬ

桐一葉 一谷 春窓

傘を差す師の俤おもかげや桐一葉
日焼けの子空欄多き日記帳
宿題を無事に終はらせ爽やかに
稲雀黄金の波に背き発つ
露草に蔽しき急雨けふ又も

蝉 東 素子

鳴き初めし蟬おろおろと弱々し
空蟬も共に包みし夜のとばり
精一杯広げし蟬の羽根の透け
昆虫も夏の樹液のめぐみ受け
狭き庭夏のドラマか命生む

立秋 山本 春英

幼児おとこの命を見舞ふ夏の風邪
立秋といへど豪雨の報しきり
家族みな待つ新しき冷蔵庫
立秋や高温多湿覚悟して
雲の峰湧き立ち襲ひ来るがごと

掃苔そうたい(墓参) 山岡 扶佐

子のくれし蟬は掌の中よく啼けり
秋立つ日子宝抱く友来阪
だしぬけに頭をこづくトンボいて
買ひ求む仏花をかかえ掃苔す
丹精の獲れし枝豆かみしめる

遠花火 東原 春城

汗とばしさらしを締めた神輿ギヤル
病床の友は天へと炎天下
向日葵を纏まとひし友は柩ひつね中
向日葵に満ちし柩つまにすがる夫
永遠の友の残像遠花火

炎天下 北畑 芳草

青年のワイシャツ白き炎天下
朝顔の支柱を越えてなほ空へ
夏帽子少しあみだに女学生
赤き爪目立ちしサンダル夏浜辺
碧空に突きささりたる夾竹桃

片陰 山内 松琴

露天風呂酷暑の町は眼の下に
健脚も一息入れる夏遊山
金沢の街は晩夏の風情中
片陰と風を求めつ庭仕事
夏座敷磨き尽せし若き僧



爽やか 早村 春鶴

爽やかに挨拶かわす子登校す
秋茄子甘き匂ひで焼きあがり
月すでに山の端離れ里照らす
落人の里は霧中溪深し
風吹きて光波打つ花芒はなすすき

かま 螂 きり 一谷 春窓

片脚の無き螻螂の面がまへ
青山を遠ざかりゆく赤蜻蛉
村中を包む烟や刈田風
秋逝くや夫の名刺捨てられず
身に沁むや母の使ひしお六櫛

あかとんぼ 赤蜻蛉 東 素子

赤蜻蛉轍のへりに羽根休め
鳳仙花咲く靈廟の日々赤し
弾ぜる実に子等の歓声鳳仙花
紅葉もみじばの落葉いと惜し掌の上に
重陽の節句平らく迎へしや

秋の夜 山本 春英

軽やかにバレエ舞う子のさわやかに
筆走る音たて揮毫秋書展
秋の夜やシチューの鍋肌ほんのりと
まだ花を残せし庭木百日紅さるすべり
秋空と海が溶けあう水平線

長月 山岡 扶佐

湯あがりの窓下にかすかちちる鳴く
窓下に集ひ居るらし虫時雨
秋紫陽花添えて遺墨書落ちつきぬ
秋紫陽花額に和みて活いけらるゝ
お供への葡萄香りて部屋に満つ

葛 東原 春城

葛のつるフェンスを越えて宙擱む
車椅子秋の空へと下り坂
秋草も馳走の一品卓の上
秋の夜や重ね着ひとつ母にかけ
花の芯のぞいて見たる藤袴

花野 山内 松琴

朝採りの胡瓜かかけて声高に
クロールで泳ぐ気分はアスリート
花野ゆく道ゆくまゝに気まま旅
風の盆飛んで行きたい下駄の音
秋めくや四師揃ひし遺墨展

秋の潮 北畑 芳草

空蟬の風にころがり来し歩道
猛暑とはこの日のことよ身も弱る
張り替へしふすまの柄も秋涼し
この暑さ耐へし墓花高野槿
片方のくつ砂浜に秋の潮



草錦

早村 春鶴

休耕の田は一面の草錦くさにしき

柚径そまみちのいよいよ狭く木の実降る

肌寒し駅舎に一人終列車

裏山のけもの径にも木の実降る

おどしにも慣れて暮かしまし稲雀いなすずめ

落葉

一谷 春窓

野佛の御手とも知らず落葉かな

のしかかる雲夕暮れの大根引き

霜の声幹こたくましき夫婦松

便箋びんせんに詫わびる無沙汰や初紅葉

神無月社殿に続く婚の列

石榴ざくろ

東 素子

角曲る人皆仰ぐ石榴の実

笑み中に自然をも守る秋天下

風邪なれどけふ香りたる金木屋きんもくせい

手をつなぐ父子おやこの脇に焼栗屋

街並みをなべて呑み込む秋の声

十六夜いざよい

山本 春英

十六夜は泣かんばかりや雲の来て

満月や亡き母住むと信じる児

短冊たんさつの菩薩ぼさつを拝受秋彼岸ひがん

一本の露草つゆくさ抜かず水をやる

更待月ふげまちつき塾の児帰る道暗く

十三夜

山岡 扶佐

清風の中に浮かぶや後の月

鼻歌も出る帰路夜半よわの十三夜

秋高し青山迫る攝河泉

初掘りぞ甘藷かんじよごろごろ庭を占め

甘さ増す気きのして甘藷いもとにらめっこ

秋灯下しやうとうか

東原 春城

棟上げの親子大工に秋の風

秋灯下恩師の臨書りんしよなぞる指

もらいたるすすきの五本床ごほんどに立て

一人居ひとりの桔梗ききやうはじける音ねのして

秋すだれ役目終へたる家普請いえふしん

秋風

山内 松琴

縁側に萩のこぼれて迎へらる

秋空に向ひてポーズとる勇者

虫の声真近に聴きて露天風呂

秋風に押されて奥飛驒ひだ露天風呂

一陣の秋風書作舞まひ散りて



神渡 早村 春鶴

樹から樹へましら走りて木の葉雨
一夜にて裏山透ける神渡
鉢割れる音の響きて神渡
冬耕の土波打ちて黒々と
持ち歩き広げぬままに時雨傘

冬紅葉 一谷 春窓

木曾流る川の碧さや冬紅葉
木曾川を狭みて紅葉山幾重
庭焚火遠嶺とおねに雲の影の這ふ
冬ざるる浜松城の野面積み
風邪気味に目覚し止めて二度寝する

秋の声 山本 春英

嫌ひたる大根嚙む少女涙して
秋風と共に届けし忘れ物
三年みつとせぶり知人に会ふ日秋の声
父を追ふ子の三輪車落葉追う
秋風に赤き傘の子遠ざかる

小春日 山岡 扶佐

大根引き二本なれども重たくて
今朝の冬喪中はがきの早届き
宮島の鳥居幽かすかに神無月
原爆碑小春の空に白き月
落葉して原爆ドーム鎮しずもれり

櫓田 東原 春城

満開の小菊は庭をキャンパスに
屋根をこす亡なき父植し金木犀
櫓田は絨毯じゅうたんのごと鳥憩ふ
老農夫菜園自慢秋の茄子
添水そうずにも慣れしか鳥の親子かな

秋の空 山内 松琴

秋空にフラのメロディー吸はれけり
日の暮れて庭木に宿す鴟との贄にえ
秋空やビルの間に間に雲流る
天高し下校の児らのにぎやかに
同郷の友の土産は又も柿

